

信長(遺)の

カキモノのイラスト



ながた
かずひさ

■ご挨拶

言葉をうまく遣えたらなあ、と思うことはありませんか。

言葉って要するに、「自分の内なる思いを表し」「相手によく伝える」ことができればいいだけのことなのですが、これがなかなか難しい。どちらが欠けてももの足りません。思いが表れないとつまらなく、伝わらないともどかしい。

僕も日々悶えているのですが、幾年か毎日書き物をして暮らしてきまして、なんとなく「言葉って、こんな感じだと納得しやすい」といういくつかのポイントが浮かび上がってきました。

そこで今回は、それをまとめてみました。宮本“二天”武蔵先生の「五輪書」にあやかり、ポイントは5つ。

もちろんこれは僕の言葉遣いのポイントですが、ある程度普遍的な真理なのではないか、と思っています。書き物以外でも、会話、さらにはものづくり、生活全般にも応用が効くのではと。

なにかのご参考になれば、幸いです。

■地の章（概説）

……「総合的」であること。多様な内容が総合的にデザインされていること。

先ほどの繰り返しになりますが、突き詰めて言えば

「『なにがしたいのか』がよくわかる」

これが言葉の最終目標です。

そのためには、「自分の言いたいことを整理して表し」「相手がわかるように伝達する」この2点が肝です。言いたいことの一部だけが肥大化したり暴走したりして、結局全体像が見えなくなったり、あるいは自分だけのオリジナル表現で相手に伝わらない。これでは困ります。（それを狙う遊びや技巧もありますが）

そこで、

「いろんな要素があるんだけど結局言いたいのはこう」

という言葉の並び、遣い方を設計するのを、「デザイン」と考えてみてはどうでしょう。

「デザイン」とは、見てくれを考えるだけではなく、モノの本質を表現しなければなりません。いかにカッコよくてもクルマのタイヤは星形にはできませんし、いかに高機能でもケータイが10kgあると困ります。機能・性能・性質といった内面を、外観に反映する。これが「デザイン」です。まさに言葉があるべき姿です。

華やぎや彩りを考える前に、トータルで伝えたいことをまずイメージする。はじめに「幕の内弁当」を意識すれば、ラザニアやカプレーゼの準備はしなくて済むでしょう。（もちろん「イタリアン幕の内」を狙うのなら話は別ですが）

全体は部分の和ではありません。部分を組んでいけば全体は勝手に見えてくる、と考えていると、散漫になったり、結局意味がよくわからなかったり、最悪言いたいことと逆のことが伝わったりします。

これが一つ目のたいせつなこと。

言葉の遣い方を考える時、私達はどうしてもカッコイイ言葉や美しい言葉といった外見のディテールに気を取られます。でもまず「表す」「伝える」という土台ができてないと、細部は意味をなしません。虚飾だけ華やかな言葉は、見てくれだけ美しくても味がないお弁当と同じで、人の心を動かしません。

さらにできれば、言葉の元となるイメージ、ネタは、多種多様な方がよい。雑多に幅広く。普段伝わりにくい専門的なネタでも、一般的なネタで補強されると、ぐっと距離が縮まります。

たとえば、F1の話。だけですと、興味ない人はそっぽを向くかもしれません。でもワールドチャンピオン・ライコネンが大の酒好きで、「走行中、普通はチューブで給水するけどアイツだけは給酒」というような一般的なネタが入ってくると、誰でもノっていきます。（もちろん嘘ですよ）「吞めば吞むほど強くなる」「その前に飲酒運転はいかんやろ」とこう、どんどん話が膨らみます。

なにかとなにかがぶつかったところにエネルギーが生じます。できるだけ多様な要素を、先入観なくぶつけ合わせてみると、おもしろい・予期せぬ結果が出てきます。「伝える」ためには、さらにはよりわかりやすく「表す」ためにこそ、逆に、今焦点があっている話題以外のイメージを持ってくることも有効です。聖書だったたとえば話ばかりではないですか。

深く掘り下げること大切ですが、そうすると話題がどんどん狭くなっていきます。それと同じぐらい、間口を拡げ、誰でも「引っかかる」話題にしていく工夫が、大切です。

多種多様多彩なイメージを駆使して、伝えたい言葉をデザインする。

それが言葉遣いの基本の心構えだと思います。

■水の章（技術論）

……口語的であること。漫文的に。噺家さんのように。リズムカルに語る！

さて、具体的な言葉の表現技法ですが、僕はつまるどころ

「いつも話すように」

これ一点ではないか、と思っています。難しい言葉を遣わずに、口語的に。

もちろん、堅い言葉の方が向いている話題もありますが、単語や内容が難しくなっても、それでも常に「話す」ことを意識する。

なぜなら、人は感じる時考える時、話し言葉だからです。その生々しさ、ライブな感覚を表すには、心が頭が使った言葉をそのまま使う方がよいでしょう。例を挙げれば養老孟司先生の『バカの壁』は「聞き語り」だそうです。話し言葉を文字化するという過程を踏むことで、行間や印象が伝わりやすくなり、難しい話もわかりやすくなったのではないのでしょうか。

「話す」と考えると、必然的に「相手」を意識します。

たとえば、文章を書く時。「語るように」書くことで、聞く（読む）「相手」を意識し、結果として「読みやすい」「伝わりやすい」文章になる。冗長になりやすい、話し言葉ならではの省略によって意味が通じにくくなる、などの欠点がありますが、それは推敲して練ればいいことです。

blogなど回っていますと、自由な話し言葉で自分の感情さらには個性をととても巧く表現されている方がたくさんいて、いつも感心します。「このblogは、この人にしか書けない」それを「いい言葉」と言わずして、なんと言いましょう。

ただ、web以外のメディア、書物や会話では絵文字やフォント替えなどのグラフィカルな技は使いにくいですから、それを言葉や文字で代替する必要があります。でも、言い換えればそれだけのことです。blog/メールスタイルがとてもよく人の感情を表せているのなら、それを、「気持ち」を伝える言葉に応用しない手はありません。

また、話すことを意識することで、自然と「音」の要素にも気を配ります。リズムカルな言葉は、それだけで心地よいものです。むろん耳心地ばかりよくて中身が無いのも寂しいですが、耳ざわりはいい方がいいに決まっています。

リアリティも増します。例えば脚本を書く時、文字だけで目で書いてますと、少女がオッサンの言葉をしゃべったりしてしまいます。「話せない/話さない言葉」はやはり違和感ですので、そういうことも「話す」意識で防げます。（もちろんそこを狙って個性を際立たせる手法もありますが）

相当厳しい内容でも、言葉が穏やかですとかなり「聞く耳」を持てます。「言い方」一つで相手に与える印象がガラリと変わる。これも会話的に言葉を選ぶと、自然とそうなります。

などなど、「話し言葉」は「相手」を意識しやすく、言葉で「表す」時つい忘れがちな「伝える」ことを思い出させてくれます。

もちろん、話し言葉にこだわる必要もなく、堅い文章語でもかまいません。言いたいことが言えて、伝われば。ただ、「文章を書くからには堅い言葉で」「スピーチをするからには真面目な丁寧語で」と手段を縛ってしまうのは、本末転倒だと思うのです。

司馬遼太郎先生の切れ味鋭いシンプルな文章は、文章語のお手本とも言うべきものですが、講演嫌いでも有名で、では話し下手かと言えばこれがやらせてみれば一級品。

いつも聴衆を満足させたそうです。

言葉の根は同じ所にある。だから、表すカタチにはこだわらない。

blogでも小説でも、一度声に出して読んでみてください。いくらでも直したい部分が出てくると思います。

表しやすい・伝えやすい言葉を遣う。それがその時一番いい言葉です。遣いにくい言葉、よそ行きの言葉を無理に遣う必要はありません。

■火の章（戦略）

……矛盾的事であること。ありえない組み合わせ、嘘、おおげさ、まぎらわしい。

さて、技法上は「話すような」意識でよいとして、では内容上の要点は。これも私はただ一点、「矛盾があること」ではないかと考えています。

たとえば旅行記をしたためる。何時にどこそこへ行って、なにを食べた、美味しかった、どこに泊まった。お風呂が大きくて気持ちよかった。どうもピリッとしません。

この「報告」が「おはなし」に変化するには、そこに「矛盾」が必要なのです。

「9時に集合の予定だった……けど田中が来ない！」

「お昼はご当地名物のイカソーメンの予定……がこの原油高でただのソーメンに！」

ほら、ドラマが。

シンデレラは虐められていた・のに魔女に助けてもらって王子様とラブラブ。

メロス走る・しかし次々に行く手を阻む困難が・メールで「ちょっと遅れます」。

「おはなし」というものは、つまるところ「崖から落ちて這い上がる」あるいは「運命という人生を締め上げる万力からの脱出(or抵抗)」そのプロセスのことです。「なにがどうなった」という結果の羅列だけでは、単なる報告書になってしまいます。

さあ、そこで、「でもみんなちゃんと集合してスムーズに進んだし……」

そこで嘘をつくのですね！ 田中でも山田でもいるでしょう、一人ぐらいトリックスターがあなたの回りにも。彼が遅れたことにするんです。あるいは一分の遅れが人生を狂わせるような大事のように言うのも愉しいでしょう。あるいは全然関係ない遅刻話で盛り上げるのもよし。

つまるところウソ・オオゲサ・マギラワシイ。JAROに怒られるものこそ、「おはなし」の華やぎです。

だって……これを言っちゃあおしまいかもしれませんが、「おはなし」って全部、嘘ではないですか。『指輪物語』はトールキンの嘘、『スターウォーズ』はルーカスの嘘、『源氏物語』は紫式部の嘘です。嘘をつけばいい、ではなくて、嘘こそが「おはなし」なのです。

歴史物だってその場に居ない以上想像の産物です。ノンフィクションだって当事者

でない以上、いや当事者でも全当事者の全てを理解している神様ではない以上、見えないところは想像で補うものです。そう、嘘をつくことに対して抵抗を持っては、「おはなし」はつくれません。

どうもここで盛り上がらない……と思ったら、「矛盾」を演出する嘘をつきましよう。話の進まない男女の恋物語があれば、隕石でも落とせばいいんです。地球が滅ぶぐらいの。えらい動きますよ物語が。

もちろん、ストーリーだけではなく、キャラクター造形でも舞台設定でもなんでも、「矛盾」は非常に有効です。最近の例を出すなら「ツンデレ」。表面上はツンツンしてるけど心の中はデレデレ。あれなど矛盾の典型です。「お姫様なのに貧乏」「男前なんだけどハード・オタク」ほら、よく使われてるでしょ？

もちろんそれに頼り切って、珍奇な話や人物を作ればいいというものではなく、「矛盾」の配置はあくまで手段です。本当に伝えたいことを彩る・かたちづくるひとつの方法論にすぎません。しかし逆に言えば、言いたいことがあるならば、味付けに悩むのも時間と労力をもったいないですから、それでシンプルに色づけてしまうのも手です。

「愛が大切なんだよ！」と叫びたければ、愛などなんの役にも立たぬ状況や人物を出してみましょう。それでもなお必要なものであるならば、本当に大切なものでしょう。

人生は矛盾です。どうせ死ぬのに、生きている。

矛盾は生命の本質です。だから気を引く、ひっかかる。

とにかく、言葉は、なにを言ってもいい。

たいせつなことを伝えるために、嘘・おおげさ・まぎらわしい、を、フル活用するのです！

■風の章（他との関係）

……共感的であること。自分がまず愉しいと、聞いている方もユカイになる。逆もしかり！

言葉を遣うからには、「感動」を呼びたい。

「感動」とはなにか。心が動くこととはなにか。

それは「共感」することだと思います。

「おはなし」は、あたりまえのことですが、たいてい自分のことではありません。それでも人がそれに笑い怒り喜び泣くのは、おはなしの中に生きる人々に、共感できるから。母を亡くした少年に涙できるのは、自らの中にある我が母への愛を思い出すからです。ピンチに陥ったヒーローと共にドキドキできるのは、そのピンチに自分も

陥った気持ちになるから、です。

ではこの共感を呼ぶには……もちろん、これこそ簡単なことで、自分がその気持ちを持っていけばよいのです。哀しいおはなしは、哀しい気持ちで。嬉しいおはなしは、嬉しい気持ちで、語る。

逆に言うと、巧くデザインでき・わかりやすい言葉を選び・矛盾に溢れた山あり谷ありのお話を作ったのに、なにか「ぐっと」こない。それは共感を呼べていない、言い換えればあなたの中に感動がまだ足りないのです。

だから、まず、自分自身を感動させましょう。

喜怒哀楽のみならず、「ほお〜っ」とか「それはスゴイ！」とか、どんな気持ちでも、まず自分から。その動いた心で、まず自分の心を動かすのです。自分も動いてない言葉で、人を動かすのはこれ、至難の業です。

実は感動って、癖になるんです。だから、無理にでも感動してると、結構感動できるようになる。「うおっ、すごい！」と声に出すだけでも盛り上がります。すごいと思えば、なんでもすごいんです。たとえば……「ダイハツのムーブはバックドアが横開きと上開きが選べるんだ！」これ私真面目に感動したんですが、99.9%の人にとっては「なんでそれで感動できるんだ」なことでしょう。（こんなどうでもいいことにこだわる日本の客の狂的な部分と、それに応えようとするエンジニア達の狂的な部分に、見えない裏地に大変な手間と金を掛ける江戸文化の『粋』を見たのです。ダイハツは大阪の会社ですが）

ま、そんなもんでして、なんでも、感動しようと思えば、できる。

だって、生きてることそのものが大感動ではないですか。よく言われる話ですが、あなたはですね、競争率3億倍を勝ち抜いた1人ですよ。宝くじどころの話ではない。

もちろん自分の感動を、相手に伝える工夫は多少必要です。「すごい！すごい！」ばかりではなにがどうすごいかわかりません。ですがその工夫をこね回すよりもまず、強く大きく感動できる心、反応のいい心、先入観を無くし常識を忘れ、疑似科学や幸福のペンダントに簡単に引っかかるようなネイキッドなハートとソウル、これをキープすることが大切ではないでしょうか。

それは誰にでもあります。すでにあります。

長年の習慣で固い鎧を幾重にも身にまとっているだけです。もちろんその鎧が様々な危機から心を守ってくれているわけですが、おはなしをする時だけは、ちょっと脱ぐ。それだけのことです。

よいおはなしを描くには、まず自分が感動すること。それが共感を呼びます。

そして感動は、するものです。させてもらうものではなく。

レッツ・ムーブ・ヨワ・ハート！！

■空の章（本質）

……空気のすること。本質はどうでもいいところにある。あたりまえのところこそ肝心。

実は私、すごいスケベ心があったんです。

「おもしろいものを書く方法」なんてものがありましたら、そりゃ楽しんで大もうけだな、と思ったんです。そのシステム研究と製作をこれ一丁頑張ってみようと。

5年。

無いです（笑）

いや、諦めるのが早いかもしれませんが、そのシステムの存在の有無は別にして、本質的に「問題は違うところにあるぞ？」と気づいたんです。

これが「たいせつなこと」。

それはなにかと申しますればつまり、「おもしろい」って気持ちは、相手に湧くものなのです。熱や電気ショックや物理的力ではなくて、こちらからはどうすることもできない。相手しか、それを湧かせることのできる人はいないのです。

となると……「絶対的におもしろいもの」なんて、無いんです。これさえ書けば世界中誰でも大感動、そんな作品は原理的に存在し得ない。ということはもちろん、それを書くシステムも、ない。

「うわーっ！……ほなどうするんや？」

と、気を取り直して、「相手が動く」ためにはどういう点を注意すればいいのか、こちらからできることはなにか、それを考え直しました。で、先の4章、まず言いたいことをよく整理し相手に伝えやすくし（総合的）、聞きやすくわかりやすい言葉を選び（口語的）、矛盾を使って彩りを添え山谷を作りだし（矛盾的）、なにより自分がよく感動して、共感してもらいやすくする（共感的）……そんな、「空気」を作り出していくこと。

これが、自分にできる最大そして最良のことではないか、と思ったのです。

言葉なのに、空気を伝える？

言葉が一番苦手なものに思えます。絵や音楽ならまだ空気を伝えるなにかがありそうですが、そういうモヤモヤとした部分をバサッと断ち切り、抽象化・記号化・普遍化して「内容」を伝えることができる、それこそが言葉の強みなのではないか、言葉の魅力なのではないか、と。

そうです、そのとおりです。

しかし、短所は常に長所と表裏一体。

空気を伝えるに、ということは、むしろ相手が「自分の」空気を作り出しやすい、ということでもあります。つまり、相手の想像力を、相手のハートをうまく刺激することさえできれば、あらゆるメディアの中で最も空気を伝えやすい媒体であるときえ言える！ ちょっとズルイ考え方ですが。

よく言われることですが、「美少女」と言葉にした時に、聞いた人はそれぞれの美少女を思い浮かべることができます。「おいしいお好み焼き」と言えば、聞いた人は

生涯ベストお好みを思い浮かべてくれるでしょう。こんな便利な話はありません。

「それより100倍うまいねん」「ホンマか！」

『現実がどうあれ』今ここに生涯ベストお好みよりも100倍美味しい伝説のお好み爆誕です。

ああこれぞまさに、創造の喜び。

言葉の効用、おはなしの効用とはつまりこの「空気」、創造された世界の共有に他なりません。

それは人の人生を、豊かにします。

リビングのソファに寝転がったまま、宇宙を旅し悪魔と戦い美女に囲まれレーザーガンを撃つ。興奮、悦楽、哀愁、歓喜、切なさ、甘さ。どんな空気も思いのままに愉しめます。

ですから、相手をその空気でつつむ。そんな言葉が、「いい言葉」なのです。

なにが書いてあるか、そんなことは問題ではありません。文法的・史実的・構造的・倫理的に正しい正しくない、巧くできてるできてない、そんなことはどうでもいいことなのです。

どんな名作・愛の詩よりも、彼女がはにかみながら囁く「すき」の一言の方が、あたたかい気持ちになれるのではないですか。めざすはその、一言です。

行き詰まったら、思い直してください。

いま相手を、どんな「空気」でつつみたいのかを。

たいていはシンプルな言葉、あたりまえの言葉、なんの変哲もない言葉、です。

でもその自然と選ばれた言葉こそが「空気」をつくり、相手を包み込み、感動を共有してくれるものだと思います。

技巧など、努力など不要、いやむしろ邪魔。心の真ん中から湧き出た言葉ならば、相手の深いところにも、よく届くものです。

その時の自分にしか言えない言葉。それは原理的にユニークな存在です。それが、おもしろくないはずが、ない。

■補遺 そのままが、いちばん。

「絶対的におもしろいものなどない」と書きましたが、ひとつだけ、あるとするなら世界で唯一のこと、前段最後に書きましたような「あなたにしか遣えない言葉」です。それは珍しく新しいもの。だから心ひかれます。

そしてそれは、難しいものでも創り出すものではなく、もうすでにあなたのうちにあります。思ったまま、感じたままの言葉を選べばいいだけです。たとえば、「カレーのように疲れた……」ドロドロのクテクテになった感じがよく出てますね。「泥酔」も類推されるかもしれませんが。そういう言葉は、コピーライターさんがうんうん唸って捻り出すものではなく、もうあなたが感じていることそのまま、なのです。

ただ、一瞬フツと、「カレーみたいだ」と思っても、「いやいやそんな表現はこの世の中に無い」「こんなこと言ったら変に思われる」「キレイな言葉じゃない」そんなストッパーが働いているのです。

言葉はそもそもコミュニケーションツールですから、より「標準的な」言葉を選びたくなる、そういう本質的な方向性を持っているのかもしれませんが。言葉に敏感な人、大切にしているほど、そのタガが強く、どんどん「ふつう」の言葉を、表現を選んでしまうのかもしれませんが。

しかし言葉は、コミュニケーションの道具であると同時に、自分を表す道具でもあります。むしろ言葉としてはわけがわからなくても、自分をよりよく表してくれる言葉を選んだ方が、コミュニケーションもうまく成立することもある。

「カレーのように疲れた」というのが、その人の疲れた姿を鮮烈にイメージさせるなら、それは「いい言葉」でしょう。

確かにバランスの問題でもありますが、そんな感じで心のストッパーを一度外して、ふと、心に浮かんだ「そのまま」を、表してみてもいいかがですか。

意外と通じるものです。人間は、全体で、まさに「空気」を読んでコミュニケートできる生き物ですから、言葉がへんてこりんでも、むしろへんてこりんであるがゆえに、通じたりします。いやそもそも、言葉のわからない外国人同士でも、酒場で一緒に盛り上がることはできるではないですか。

言葉は大切なものです。でももっと大切なのは、「あなたがあなたであること」です。あなたはたった一人の、ユニークな存在ですから、そのままを表現すれば、ユニークなのです。

いやいや私は平凡で？ いえ、その昔「大凡人」を選ぶTV番組がありましてね。いろんな設問を二択で出し、多数の方を選んだ人が残り続けるんですが、100人が10問もすると数人になるんです。「大凡人」というのはだから、すごく特殊な人なんですよ。

そしてこれは、言葉のこのみならず、だいたい全てにおいてそうなのではないか、と思います。

人間は進化する生き物ですから、「ああなりたい」「こうだったらいいな」と「今の自分」とは違う姿を、憧れを思い描いて生きています。それはそれでいいことなのですが、でも、それはそれとして、「今の自分」を否定する必要は、ぜんぜんありません。

「今の自分」には、「今の自分」にしかできないことがある。強く賢く美しく優しく正しく進化した「明日の自分」には、できないことができる。ぐーたらしたり、落ち込んだり、バカを言ったり、鼻水を垂らしたり、深夜にラーメンを貪り喰ったり……って、こっちの方がおもしろそうでしょ？（笑）

名音楽プロデューサー武部聡志氏吼えて曰く、

「挫折も知らない人間の歌を、誰が聴きたいんですか」

まさしく！ 弱いところ、駄目なところに人は共感します。

だって自分も、そうなもの。

そのまま「でも」いい、ではなくて、そのまま「が」いいんです。

間違いは謝ればいい、足りなければ助けてもらえばいい、落ち込んだら、また明日顔を上げればいいだけのことです。だから今日は、そのままです。

そのままが、いちばん。

言葉には魔力があります。天地を動かし、鬼神も泣かしむる。

「鬼が泣いた」と書けば泣いてますからね（笑）

そんな感じで、「今日はハッピー」と言えば、それはハッピーな日になるのです。笑ってなにかを語れば、それはすべて「笑い話」になる。

こんな便利で強力な道具を、遣い倒さない手はありません。

お気に召すまま、「あなたの言葉」を紡ぎましょう。

それが、言葉遣いにたいせつなこと。

■おくづけ

作者：ながたかずひさ

発行：サークル「PowerNetwork!!」

発行日：2008.8.17

web：www2a.biglobe.ne.jp/~nagata/

mail：kazuhisa.nagata@gmail.com

お読みいただき、ありがとうございます。またいつか、どこかで。



PowerNetwork!!